



襟は立てないレウエストベルトもキチンとバックルを通してあるなど、ボギー一流の着こなしとはまた違う正統派なトレンチ姿  
Photo: AFLO

# その着こなしに理由アリ

エレガンスの社会学

文 中野香織

## 第9回

**い**

まさらなにを、のジョージ・クルーニーではある。「世界一セクシーな男」もとても理想的な独立身男「米ヴァニティフェアが選ぶベストドレッサー」などなどの人気ランキングの先頭集団の常連としてすっかりおなじみ。すでにいろんな人がいろんなところでクルーニーの魅力を語りつくしている感がある。

それでもなお、ジョージ・クルーニーについて読むこと、語ることは楽しい。感情を動かす振り幅の大きい音楽や映画は繰り返し「経験」し繰り返して聞いたり読んだりするのもそれに近い。なにせ、シリアスな社会派から女好きおバカ中年男に至るまで、実にさまざまな顔を見せてくれる。

先月中旬、新ガールフレンドとハレー・ダビッドソンに乗り事故を起こして負傷したその3日後の姿にも、あんぐりさせられた。

『マイケル・クレイトン』のクレイトンに出席したクルーニーは、あごひげぼうぼうであばら骨の亀裂を耐える痛々しい姿。足を負傷したガールフレンドのサラ・ラーションも松葉杖でドレスアップし、あごをメイクで隠して同伴した。こんなムリをしての出席は、けがを心配させないためのジョージ

**な**

らしい気配りか…と一瞬思ったものの、新恋人が「有名でお金持ちになりたい」と言って元カレと購入した家を飛び出したあと、ゴードンサーやホステスをしていた自称女優さんだったことなどが明らかになるにつれ、なんだか安っぽいカッパル…とツツコミたくなった(失礼)。

そんなしようもなさ、バカっぽさもまた魅力の一つに変えてしまおうところが、ジョージ・クルーニーの人間力か。

社会問題に真正面から取り組むシリアスな姿勢、記者会見場を爆笑の渦に巻き込むユーモアと知性を備えた映画ビジネスマンの顔、そうした骨の太さがあるからこそ、やんちゃをやつてもおバカをやつてもますます愛されるのだろう。このバイク事故にいたっては、接触した車の相手が「彼はいい俳優だし、とてもいい人間だよ」という理由でクルーニーを訴えなかったことが評判になった。あの訴訟天国で、事故までもがクルーニーの男を上げることに貢献したのである。

**な**

んだか具体的な着こなしの話がないままクルーニー賛しているが、実はほかならぬこの点、装いのことなどどうでもよく見せてしまっ「人間力こそ、クルーニーの装いのキモがあるのではないかとも思う。いかなる顔を見せるときであれ、彼の服が強くなにかを主張することは、ない。シャツの胸元の大胆なボタン開けや黒シャツなど、下品に転びかねないアレンジやアイテムも、すんなりグレーヘアになじませている。たかが服。でもいいものを選び、楽しんで着る。服のあるじはあくまで自分」というリラククスして満ち足りた装いの雰囲気、「たかが短い人生。でもいい仕事を選んで

## トレンチコートは“人間力”で着こなす？

いい仲間と楽しんでつくる。人生をコントロールするのはあくまで自分」という彼の考え(たぶん)とだぶって見えてくるあたりが、心にくい。「たまじめにやるべきときは、テレサにやる」という姿勢も、フォーマルウェアの本格的な着こなしに表れているように見える。

そんなクルーニーの主演映画「さらば、ベルリン」が9月末に公開された。ステイブ・ソダバーグ監督による1945年のベルリンを舞台にした映画で、全編モノクロ。降りしきる雨のなか、機内に消えるヒロインを見守るトレンチコート姿のジョージ・クルーニー…というのは40年代トレンチ王、ハンフリー・ボガートへのオマージュと思われる。アグリーハンサムなボギーが「カサブランカ」でこれを着るとき、ボタンをかけずに前で打ち合わせ、ベルトはバックルを通さず無造作に結んでいた。襟を半分立てた崩し着コートに降りしきる雨の粒(塵埃)トレンチ(生まれのこのコートは傘ナシが基本)がかもしだす男のシブさは、ボギーをトレンチコートの永久不滅アイコンに押し上げた。

映画のクルーニーはそのまま現代に移しても通用する、トレンチは古びないなあ、と眺めるうちにふと思っ「ジョージ・クルーニーはトレンチコートだ」と。第一次世界大戦時に生まれて21世紀の今なお魅力を失っていないトレンチコートなのだが、なぜこんなに長寿かといえば、英語でいう、ヴァーサイル(Versatile)なのである。いろんな場面で活躍することができる、多岐多才。場にに応じてさまざまな顔を見せることができる、応用力の広さ。揺るぎないホンモノであるがゆえの、なんでもオツケーな寛容ぶり。

**な**

んでもオツケーだからこそ、同じコートが現代においてはポップな洗練の表現にもなりうる。たとえば、起源を研究して今におとしこむ服をつくることで知られる「アーカイブ&スタイル」の坂田真彦さんにとっては、理想のトレンチのアイコンは、スタイル・カウンスルのポール・ウェラーだという。

「ジャストサイズのトレンチコート、くるぶし丈のスリムパンツ、タツセルローファー、インナーはパネルボダーのぐるぐる巻きスカート。この軽快な着こなしにやられました」と坂田さんは語る。ハードボイルドな重厚感があるからこそ、現代の着こなしとしては「軽さやヌケ感が大切だし、そのバランスが個性につながるのでは」と。

なるほど、重厚な本質があるからこそ軽くヌケた感もいっそう愛されるあたり、やはりクルーニーと通じるところがある(ちと善しいが)。

ともあれ、チャールズ皇太子風の品格はもちろんのこと、アラン・ドロン風アブナさ、ビーター・セラーズ風お茶目、ウッディ・アレックス風情けなかわいさ、とトレンチコートの表現は着る人の数だけ存在する。コートのあるじはあくまで着る人、人間力で勝負しなくてはならないゆえに、飽きることがない。トレンチファンにとってはいまさらなにを、の話だが。

### Kaori Nakano

服飾史家。人に会って、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。著書に「モードの方程式」『着るものがない!』(ともに新潮社)などがある。